

『村の司祭』試論

——叙述を通して

渡部浩見

序

バルザックは『村の司祭』について自ら次のような矛盾した感想を残している。1839年、友人ゴーチェに宛てた手紙の中で、「僕は文学においてこれほどの効果に到達できるとは思っていませんでした。『村の司祭』は僕の予測を上廻る出来です。」と語ることできた彼が、1841年、ハンスカ夫人への手紙では次のように告白する。「ついに『村の司祭』が出ました。この本には非常に多くの時間を費しました…なのにまだ未完成で、完璧ではないのです。」⁽²⁾ この矛盾はそのままこの小説が最近まで受けてきた相容れない評価につながっている。一方で、「流産に終わった作品の跡を残す後半部…」⁽³⁾、「鑄造しそとなった彫像のような人物…」⁽⁴⁾、「構成を欠いた、ちぐはぐな要素から成った小説」⁽⁵⁾と批判され、他方で「驚くばかりの神秘の広がりを持つ不思議な小説」⁽⁶⁾、「ドストエフスキーを予告するドラマ」⁽⁷⁾といった賛辞が与えられているのである。又、「ちぐはぐな要素」として特に指摘される、技師ジェラルルの手紙を取りあげて、この小説の再評価を行なう研究者もいる。

バルザックが絶えず作品に手を加えていくことは知られているが、この小説は、常以上に加筆、訂正によって形を変えていった作品である。『村の司祭』に対する作者と読者の双方によってなされた矛盾する評価は何に因るのか。それは、小説の生成過程と密接に結びつけて検討せねばならないことのように思われる。作品の変遷については後に述べるつもりである。一方、この小説に対する評価の多様性は、宗教小説であり、恋愛小説であり、社会小説でもあるこの作品の多面性からきていると思われる。この多面体小説を様々な角度から読むことで、新たな像が見えてくるのではないだろうか。

例えば、ファラベージュのエピソード、ジェラルルのエピソードを、その社会性を強調することでのみ重要と認めるならば、このふたつがヴェロニックの情念のドラマから浮き上がったものになるのは事実である。しかし、ヴェロニックにとってファラベージュはタシュロンの分身として存在しているのである。又、彼女はジェラルルがタシュロンの妹ドゥニーズと結婚し、自分の死後、タシュロンとの間に生まれた息子の親代わりとなることを遺言として残して逝くのである。この二点に注意すれば、「村の司祭」は、最後にヴェロニックの意識のドラマとしての均整のとれた全体像を現わしてくるのである。作者がいか(8)に宗教小説であることを主張しようと、又、加筆によってこれが政治的側面をあらわしてゆこうと、作者が自己本来の腕を見せることができたのは、ヴェロニック・グラランの物語に於いてであろう。

ここで行なおうとしているのは、更に違った角度からの読みである。即ち、この作品を叙述のレベルで論ずることも可能なのではないだろうか。「村の司祭」の叙述の方法に注意を向けた時、先ず指摘できるのは、観察者をテキスト内に配置し、この観察者の意識のレベルに合わせて行なわれる叙述が見せる複雑な様相である。小説の後半にはこの観察者の介入が見られないのであるが、前半に特徴的に見られる観察者の持つ意味は、相応関係にあるか、或は対立関係にあるかによって、以下に見ていくように二段階で捉えることができる。こうすることで、「村の司祭」の持つ二重の構造が明らかになり、更に批評の撞着も理解されるのではないだろうか。

(1)

ヒロインの前半生が語られる第1章〈ヴェロニック〉の冒頭、ソーヴィアの店の描写には、バルザックの作品の前半にあってしばしば見られる「通行人」の視線が置かれる。しかし、単にこれが、複数の視線を次第にひとりの人物の視線に集束させてこの人物の物語を展開するための手段となるのではないことがわかる。ソーヴィアの家でヴェロニックが生まれた時から、この章の終わりまで、この人物の生長過程、容貌の変化は、リモージュの人々、境界の人たち、友人たちの目に映るように、従って外側から見られたものとして描かれていくのである。ヴェロニックが美しい少女であったこと、両親に溺愛されて育った

こと、天然痘にかかり醜いあばたのある顔になったが、不思議な現象から、何かの感情に動かされると美しい表情が浮かぶこと、これらはみな観察者の目が捉えるままに伝えられる。

... les passants s'arrêtaient pour la voir. ⁽⁹⁾

... les passants et les voisins virent ... ⁽¹⁰⁾

Les voisins pouvaient voir de chez eux ... ⁽¹¹⁾

といった表現が絶えず繰り返される。ヴェロニックは銀行家グラランに嫁ぐ。彼女にとって結婚生活は苦痛でしかないのだが、この頃のヴェロニックも観察者である周囲の人々の目に映るグララン夫人の姿として描かれる。

Il fut dit dans toute la ville que Mme Graslin était laide, mais bien faite. ⁽¹²⁾

... elle fut alors regardée comme bonne, mais stupide. ⁽¹³⁾

又、数年の後、ヴェロニックが表情に明るい美しさを取り戻してゆく様は、同じく彼女の友人たちに驚きをもって認められるが、彼らにその変化の理由がわからないように、読者にもそれは知らされない。

... Mme Graslin arriva, sous les yeux de ses amis, à un point de beauté vraiment extraordinaire, et dont les raisons ne furent jamais bien expliquées. ⁽¹⁴⁾

こうして、グララン夫人の内面生活にこの頃何が起こっていたかについて、一切の説明は行なわれず、グララン夫人の妊娠がリモージュで噂になるところで第1章は終わる。

第2章<タシュロン>に入ると、物語は突然その頃起こった殺人事件へと移

ってゆき、グララン夫人は舞台の前景から遠のき、観察者の視線を通して描かれることをやめる。容疑者としてタシュロンという青年が捕まるが、読者の関心を引きつけつつあるこの事件の状況の概要は、次のような方法を用いて語られる。

Voici, mais succinctement, les éléments de l'acte d'accusation que préparait alors le Parquet.⁽¹⁵⁾

この前置きの後、段落が変わり、語り手は、警察の捜査順序に従って、予審の結果を「起訴状のあらまし」として語り始める。

L'Instruction étendit ses perquisitions jusque dans les maisons suspectes et chez les femmes de mauvaise vie, mais ...⁽¹⁶⁾

L'instruction alla chercher des renseignements dans la classe des ouvrières et des grisettes, mais ...⁽¹⁷⁾

Le Parquet et le juge d'instruction attribuèrent à la passion du jeu l'assassinat commis par Tascheron; mais ...⁽¹⁸⁾

タシュロンは一切口を割らないが、彼の犯行であること、又、裏で糸を引いている人物のあることを証拠立てる事実も

Les preuves, dont voici les principales, étaient...⁽¹⁹⁾

という表現が示しているように、語り手によって「主なもの」だけ要約されながら伝えられる。警察側はいくつかの証拠から共犯者がいると考えるが、この恐らくいるにちがいない共犯者の方に警察の注意が集中していくに従って、文体は、次第に憶測内容そのものを独立節に置くものへと変わっていく。

Peut-être une bourgeoise, sûre de la discrétion d'un jeune homme

taillé en Séide, avait -elle commencé un roman dont le dénouement
était horrible ? Cette présomption ...⁽²⁰⁾

Les deux amants avaient pu s'entendre pour voler, et non pour
assassiner. L'amoureux Tascheron et l'avare Pingret, deux passions
implacables s'étaient rencontrées sur le même terrain attirées toutes
deux par l'or dans les ténèbres épaisses de la nuit. Afin d'obtenir
quelque lueur sur cette sombre donnée ...⁽²¹⁾

「この推定は…」、「この不分明な論拠に…」と続いているように、いずれも文
全体が警察の憶測内容であることは明らかである。語り手は、人物以上に真相
を知るものとしての証言や解説を一切そこに差し挟まず、事件の外側に立たさ
れる観察者でしかない警察の思考の中に読者を置き去りにする。そして、結局
は謎を解き得ないこの観察者と共に、読者を絶えず真相の外側にとどめ置くの
である。

しかも、この章では、作者によって更に巧妙な操作が行なわれる。この事件
とその裁判は、リモージュ中で騒がれ、人々の関心を引きつけているのだが、
第2章に入って姿を消していたヴェロニックは、ここで裁判劇の傍観者たちの
ひとりにすり替えられて登場する。筋書き上の正当化は、次の設定である。グ
ララン夫人宅を訪れる客のひとり、次席検事グランヴィル氏からか、開廷にあ
たって陪審員のひとりに指名された夫グラランからか、夫人が「刑事訴訟につ
いての一部始終を知ったに違いない」ことが語られ、ヴェロニックの客間での
会話の場面が描かれる。当然ここでヴェロニックも、関心的である共犯の女
性、この未知の人物についての推測を語る。

ここで、第1章、第2章に配置された観察者が、叙述の中で同じ機能を持っ
ていることがわかる。第2章が、「この同じ年に…」と始まっているように、
第1章と第2章は、物語内の時間に於いてつながっていながら、物語る視点の
転換によって、両者は、ヴェロニックとタシュロンという別の人物を核にした
ふたつの空間を構成している。ところが、ヴェロニックが「美しいグララン夫
人」に変わっていた理由と、タシュロンが盗み・殺人と二重の罪を犯した真の動
機は、テキストの裏でひとつに重なり、ひとつのドラマが隠絵のようにテクス

トの裏側に綴られている。観察者の視点が設置されることで、描き出される対象、語られる出来事は、衝立の向こう側にしか存在しないことになる。そしてこの観察者は謎を解読する能力を故意に奪われているのだから、描かれる物も語られる事も、読者にとって、闇の存在となって迫ってくるといえよう。

(2)

次に、第3章〈モンテニャックの司祭〉の冒頭の描写に関するひとりの観察者に焦点を合わせてみよう。

まず、物語の流れを簡単に説明しよう。タシュロンは死刑の宣告を受けるが共犯の女性については口を割らず、刑執行を前に懺悔を拒んでいる。そこで、真相を追求する警察と、犯人の悔悛した姿によって民衆に宗教の力を示す必要に迫られた教会側の利害が一致し、タシュロンから告白を得るための最後の手段として、彼の故郷、モンテニャックの司祭が呼ばれることになる。第3章は使者として送られるラスティニャック神父のモンテニャックへの旅で始まる。

ラスティニャック神父がボネ司祭に会うまで、風景と建物の描写がえんえんと続く。ところで問題はその手法であるが、描写はこの神父に視点を合わせて行なわれる。即ちここでの観察者はラスティニャック神父である。テキストのこの部分に於いて、視覚動詞が頻繁に用いられる。この観察者は、先ず荒涼とした風景を目にし、次いでボネ司祭が変革の礎を築いた村の素朴な風景を見るが、風景は彼に何の感動も与えない。

Aussi ce spectacle ne parut - il pas extraordinaire au jeune abbé quand il embrassa par un coup d'œil ce gracieux paysage. Il ignorait l'état de ce pays avant l'arrivée du curé Bonnet.⁽²²⁾

この観察者が見抜くことができないものは何だろうか。何の変哲もない素朴な風景が、この土地にやって来たひとりの司祭の努力によってここまでに至ったものであること、即ちボネ司祭の影響力をである。

次いで描かれる司祭館も、この神父の視点で捉えられ、視覚動詞の使用頻度は更に増していく。

Quand le jeune abbé vit ...⁽²³⁾

L'abbé Gabriel entra dans la salle (...) et y vit un pauvre
mobilier ...⁽²⁴⁾

En y jetant un coup d'œil, le jeune prêtre aperçut des
fauteuils ...⁽²⁵⁾

... une autre porte (...) permit à l'abbé de Rastignac de
mesurer le peu de largeur de ce jardin ...⁽²⁶⁾

...d'où se découvrit à ses yeux (...) le magnifique spectacle
de la vallée ...⁽²⁷⁾

...l'abbé Gabriel regarda tour à tour le village (...), puis
cette vallée (...), sa rivière (...) il entrevit confusément les
beautés de cette cure où il rentra pour en examiner les détails
avec une curiosité sérieuse.⁽²⁸⁾

室内の様子、庭からの眺めが、ラスティニャック神父の目に映ずるままに描か
れているのが明白にわかる。

一方、ボネ司祭が教会でミサをあげていることを留守番の少女から聞いて、
この観察者は教会の方へ向かう。教会の外観と内部の様子がふたつの段落にわ
たって細かに描写されるが、ここには「ラスティニャックは見た」、「彼は眺め
た」という表現は見当たらない。ただ、

Au - dedans, l'œil s'attachait d'abord à la toiture ...⁽²⁹⁾

À l'aspect de cette chétive maison de Dieu ...⁽³⁰⁾

という文章が示しているように、そこには誰かの視線がある。ラスティニャック神父の視線を通して司祭館が描き出され、次に彼は教会に足を向けたのだから、先ずこの視線も彼のものと思われる。ところが、次の段落は、

L'abbe Gabriel se glissa doucement ...⁽³¹⁾

と始まり、ここで初めて彼は教会の中に「そっと入り込む」ことになる。しかもここから彼の見た教会内のミサの光景が描写されるのである。従って、「入る」という動作に先行して、教会内部が子細に観察されるはずはなく、前の二段落にある教会の描写は彼の視点によるものとはいえない。或は、絶えず作者の注釈がつきまとうこの描写の中に、視線の源を問うこと自体意味を失うかのようだ。しかしそれにしても、前後の段落で観察者ラスティニャックの視野はあまりに厳密に守られてはいないか。ミサの最中の教会、そこにある、悲嘆にくれたタシュロン一家の姿、ボネ司祭の肖像は、この観察者の見たものとして描かれているのである。

ここまで見てきたように、ひとりの使者がボネ司祭のもとに着くまで、えんえんと続く描写は、観察者の介入によって複雑な様相を見せている。

この観察者ラスティニャックの機能と、本論1部で見た観察者の機能には差異がある。ラスティニャックが観察者となってテキストの表面を独占している時、即ちタシュロンが断頭台に送られようとしている時、ヴェロニックの内面に起こっているはずの恐ろしいドラマは最も隠されている。後にグララン夫人はモンテニャックに移住し、この貧しい土地の改良事業に貢献することになるが、この地を訪れる神父が最初に見た荒涼とした風景は実はこの時のヴェロニックの内的風景そのものであり、この観察者は風景の象徴的意味を読むことができないのである。この点までは確かにこの観察者は、本論の1部で見た観察者と似た立場に置かれている。しかし、モンテニャックの村落の描写に入った時から、この描写の機能は、別の方向に向かっていくことが感じられたと思う。描写によって指向されるものが何であるかを考えると、ここでは描写の機能の軸が、ヴェロニックからボネ司祭に移っていることがわかる。そもそも、ここで初めて「村の司祭」が登場することに驚かぬ読者があるだろうか。

これには以下のような背景があるのである。

1839年、プレス紙に掲載された『村の司祭』は、1.<村の司祭>、2.<ヴェロニック>、3.<ヴェロニックの死>の3部で成っていた。第1部はほぼ現在の第2章<タシュロン>及び第3章<モンテニャックの司祭>に相当し、第2部は現在の第1章<ヴェロニック>にほぼ対応する。この版の『村の司祭』の冒頭は、リモージュの司教館のテラスの場面で始まる。即ち、殺人事件の犯人の悔悛が得られぬことを憂慮する聖職者たちが、相談の上、犯人の生まれ故郷の司祭を呼ぶことにするところである。従って、「村の司祭」なる人物の登場が予告された上で、この事件の裁判の経緯が語られる。勿論ここにはヴェロニックに関する叙述はない。次にラスティニャック神父が使者としてボネ司祭を迎えに行く場面が続き、後は、モステニャックの教会の場面、ボネ司祭の人となりの紹介、監獄での再会、刑の執行、盗まれた金貨の返却と、ヴェロニック(32)に関する叙述を除く、現在の第3章の大半がきて第1部は終わっている。

本論の序で少し触れたように、バルザックは、「福音的」人物、ボネ司祭を中心とする作品を構想していた。この本来主人公として考えられていたボネ司祭は、タシュロンとヴェロニックを悔悛に導く役を担わされている。従って、第3章の冒頭に見てきた観察者の介在する描写は、主人公の登場へのプロローグとしてあったものなのである。

ところが、1839年の第1部、第2部には、本論第1部に見た観察者の介入する叙述が既に存在し、支配的効果を生んでいた。その上、第3部に描かれるのは、既に死を前にしたヴェロニックの姿で、この間の時間的空白は、ボネ司祭が罪ある女を悔悛に導いてゆく過程を描くことを不可能にしたのである。作者は大幅な加筆を行ない、1841年の初版でこの空白は埋められる。ここで加筆された分量は、バルザックにあっても稀なほど多いのであるが、(33)新たに導入された人物とテーマの波に押されて村の司祭は本来あるべき人物像から更に遠のいてゆくのである。こうして初版の出た後、ハンスカ夫人へのあの告白が現われるのである。初版の序文で、作者はなお一巻増補する予定であると述べているが、1846年のフルヌ版で、彼はこの意図を達成するだろうか。次に挙げる文章は、第2章のリモージュの司教館のテラスの場面に先立つものである。

... un dernier parti dont la réussite devait avoir pour effet

d'introduire dans ce drame judiciaire le personnage extraordinaire qui servit de lien à tous les autres, qui se trouve la plus grande de toutes les figures de cette Scène ...⁽³⁴⁾

この誇張された作者のメタディスクールこそ『村の司祭』の中で最も読者を裏切るものである。読者の期待をとはいえぬまでも。フルヌ版は細部のごくわずかな修正にとどまり、作者はこの一節を置いたまま、二度とこの主題には立ち帰らない。⁽³⁶⁾

第3章の冒頭、ラスティニャック神父の視野を借りて行なわれる描写が、第1章及び第2章の描写と異なる機能を持っていることは先に述べたが、このことは、以上のような背景を考慮に入れることで明らかにされるのではないだろうか。同じように観察者を置いて、彼らの意識のレベルで叙述が行なわれるのだが、ラスティニャック神父の視野を借りた描写は、モンテニャックの村落、司祭館、教会というすべてポネ司祭の属性の象徴としてあるものに向かうのである。この人物が主人公であることを放棄してゆくと、この描写の機能は、方向性を失ってしまうのである。これに対して、小説の第1章と第2章に置かれた、複数の形を成さない観察者、名前さえ持たない架空の視線の群は、架空の世界から現実の世界へと自由に叙述の網の目をすり抜け、読者の属する世界に忍び込むかと思えば、次の瞬間には、隠絵の中にいるドラマの主人公、ヴェロニックの擬装された視線に重ねられる。この叙述の技巧が生む効果こそ、初めに引用した、強い満足感の伝わってくるあの手紙を作者バルザックに書かせたものではないだろうか。ゴーチュへの手紙は、1839年4月28日、『村の司祭』の第2部〈ヴェロニック〉の執筆中に記されたものである。

註

- (1) Lettre à Théophile Gautier, 28 avril, 1839, *Correspondance* III, p. 596, Garnier 1964.
- (2) *Lettres à Madame Hanska* II, p. 5, les Bibliophiles de l'originale.
- (3) G. de Molènes, cité par Ki Wist, *Les Manuscrits du premier jet de Honoré de Balzac*, " *Le Curé de village* ", Bruxelles, 1964, p. XLVII

- (4) H. Taine, *Nouveaux Essais de critique et d'Histoire*, 1865, p. 92
- (5) Ki Wist, *op. cit.*, p. XL
- (6) M. Bardèche, *Une lecture de Balzac*, Les Sept couleurs, 1964
p. 373
- (7) P. Citron, *Introduction au Curé de village*, Garnier - Flammarion,
1967
- (8) 例えばハンスカ夫人への手紙には、1838年から1840年にかけて、絶えず「村の
司祭」の宗教性が強調されている。1841年の序文にも、「宗教的な」「カトリック
的な」という言葉が見られる。
- (9) Balzac, *La Comédie humaine*, t. IX, p. 646, nouvelle édition de la Pléiade,
- (10) *ibid.*, p. 648 1978.
- (11) *ibid.*, p. 651
- (12) *ibid.*, p. 665
- (13) *ibid.*, p. 667
- (14) *ibid.*, p. 679
- (15) *ibid.*, p. 685
- (16) *ibid.*, p. 687
- (17) *ibid.*
- (18) *ibid.*
- (19) *ibid.*
- (20) *ibid.*, p. 688
- (21) *ibid.*, p. 688-689
- (22) *ibid.*, p. 712
- (23) *ibid.*, p. 713
- (24) *ibid.*
- (25) *ibid.*
- (26) *ibid.*, p. 713-714
- (27) *ibid.*, p. 714
- (28) *ibid.*
- (29) *ibid.*, p. 715
- (30) *ibid.*, p. 716
- (31) *ibid.*, p. 717
- (32) 続く第2部〈ヴェロニック〉は、現在の第1章全体、及び、第3章の後半、ヴェ
ロニックに関する叙述より成る。従って第2部では物語内容に於ける時間は廻り
グララン夫人の妊娠まで物語が進んだところで第1部に語られる時間に追いつく
ことになる。第3部は大体現在の第5章〈ヴェロニックの死〉に等しい。ここで

わかるように、1839年プレス紙に載せられた『村の司祭』には、現在の第4章〈モンテニャックにおけるグララン夫人〉にあたるものがない。これは1841年初版に初めて現われる。初版では、現在のようにヴェロニックの前半生が語られた後、裁判の話に移るので、叙述は年代順に従い、しかも、1839年の第2部と第3部間の時間的空白が埋められて、小説全体は直線的なものとなる。この後の加筆、訂正には重要なものはないので、これで大抵現在の『村の司祭』の形が決まったといえる。

- 33) プレス紙の『村の司祭』と初版の分量比は5:7である。
- 34) *ibid.*, p. 699
- 35) 1844年の春から急に体力の衰えを覚え、しきりに疲労を訴えていたバルザックは創作面でも休息の必要を感じていた。ちょうどその頃、ハンスキ氏の死後延び延びにされていたハンスカ夫人との結婚が、夫人の娘の婚約という出来事のため、再びバルザックに希望を与える。夫人から会いたいと知らせを受け、バルザックはハンスカ夫人、その娘、彼女の婚約者と1845年5月ドレスデンで落ち合った後、西ドイツ、オランダを旅し、パリに帰って彼らを案内し次いでベルギーを訪れる。いったんパリに帰ったバルザックは、9月再び彼ら一行に加わり、秋にはナポリローマを旅し、11月パリに帰る。そうしてこの間彼の『人間喜劇』はほとんど忘れられていた。長年精力を使い果たしてきた彼は、この頃すべてを忘れたように未来の妻との旅を楽しみ、結婚後ふたりで住むための家、家具、骨董品のことで頭をいっぱいにする。フルヌ版巻末の日付が〈mars 1845〉となっているところから、彼はこの作品に意欲を燃やすことはできなかったといえよう。1845年という年は、ここ15年来、バルザックが最も仕事机に向かうことの少なかった年なのである。